
今日

K2

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日

【Nコード】

N9842C

【作者名】

K2

【あらすじ】

逃げ道シリーズの第8段。団長の沖田の友達と副長のLoves
tory。

（前書き）

逃げ道の第8段です。 8段目なので、この話だけでは、わかりにくい所もあると思いますが、どうか最後までお付き合いください。

「光来 起きろ」

「んー あれ？沖田さん」

「あれ？じゃねえ起きろ」

「俺 今日は、昼まで非番ですよ」

「んなこたあ分かってんだよ 検診だ」

検診・・・ああ・・・

「俺 もう大丈夫ですよ」

「それも分かってんだよ

一応だ」

一応・・・ね

「着替えたら、さつさと来い」

「あーい」

検診なんてもう必要ねーのになあ・・・

「失礼しまあす」

「おお 光来久しぶり」

「久しぶり 一雅くん」

東夢 一雅「どうむ いちが」25歳 沖田さんのダチ・・・たぶん で、医者をしている。

「じゃ そこ座って」

一雅くんの前に用意された イスに座る。

「ちよつとやけ 前 上げとってね」

一雅くんに言われた通り、団服のシャツを上にあげる。
ピクッ

「あつ 言つの忘れとった 聴診器 冷たいけ」
「遅いよ」

「ゴメンね」

沖田さんとは、大違いだ。

見た目からして、怖そうな沖田さんと 優しそうな一雅くん。

実際そうなんだけど・・・

「よし もういいよ 大丈夫」

「だろお なんて、沖田さん毎月毎月 検診させんのかな」

「やっぱ 心配なんだよ 11、12才ぐらいまでは、体 弱かったからな光来」

「まあね」

「それにしても光来」

「なあに？」

「お前 エロくなつたな」

「はっ？」

一雅くんの発言に目を見開く。

「体 キスマークついとつたよ」

「え」

絶対 沖田さんだ。

この間の・・・

「誰とやつたん？」

ニヤニヤしながら、こっちを見てくる。

「俺とやつた」

タバコを吹かしながら 検診用の部屋に入って来る沖田さん。

「びつくりしたあ でもやつぱり？ タと光来 できてると思つてたんだ」

「うえ！？ 分かつてたの？」

「分かるって、光来 カワイイもんな」

俺の頭をなでる。

「おい 一雅、光来は、やらねーぞ」

「分かつてるって、それに俺は、ココの副長ねらい」

「「副長！やべっ」」

ドアの方で突然の声

「恭二と時？ こっちおいで」

ニコツと笑って、手招きをする一雅くん。

「すいません 一雅さんが久しぶりに 来てるって聞いたんで」

「久しぶりって、毎月 来てるよ俺は」

「いや でも俺ら先月 会ってないんで」

「ああ そっか」

「っーか 一雅くん 副長ねらいつて本当？」

「本当」

「入るぞ」

「おお 副長」

一悟 司季「いちご しき」23歳 団の副長

「何だ お前らココにいたのか」

「いました あっ！副長 一雅くんが」

「時い！？」

「ヤベっ 何もないです」

「どーでもいいが お前ら 集会場に集まれ」

「俺もですか？」

「悪いな 昼まで非番なのに」

「いやいいですよ 沖田さん 行きましょう」

「ああ テメエらも行くぞ」

「「はあゝい」」

「一雅 テメエは、まだいるなり、帰るなり 好きにしろ」

沖田さん なんか今日 優しい・・・

いつもなら、帰れって言うのになあ

でも よかったやん一雅くん

「後は」

司季が、持っているボードを見る。

「もう全員だ じゃあ東夢さん 俺もこれで」

「あっ 司季くん」

「はい？」

「今日の夜 空いてる？」

「夜 ちょっと待ってください」

手帳を取り出し、ページをめくっていく

「今日なら 大丈夫ですよ」

「そう それなら、今日」

「時 知ってる？」

「何が？」

「がやがやと騒がしい集会場。いきなりの呼び出しだから、何かあったのだろう……」

「1 番前には、タバコを吸いながら面倒臭そうに報告書のような物を見ている沖田さん。」

「あの顔は、たぶん將軍が街に来るから 俺ら団が護衛しろとかだな。」

「矢吹も聞くか？」

「何をですか？」

「副長な 俺に一雅くんが、今度いつ来る？とか 毎月 来てるんだよな？とか 結構聞いてきてたんだよなあ」

「「マジで！？」」

「マジ マジ」

「じゃあ よかったですね 一雅さん」

「よかったよな」

「並べえ」

「おっ 来た」

「なんか 嬉しそうじゃない？副長」

「俺と矢吹と時が顔を見合わせてニヤッと笑う。」

「よかったねえ 副長、一雅くん。」

終劇

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9842c/>

今日

2010年10月17日02時28分発行